著者紹介

伊藤　貴康
Takayasu Ito
岐阜大学医学部附属病院 医師育成推進センター 助教

2007年、三重大学医学部卒業。三重 ACLS 二代目ディレクター。初期研修医１年目に ICLS コースの指導者デビューを果たすと、それから約４年で ICLS ディレクターに認定される。数々の失敗も経験しながら、尊敬する先輩指導者たちから、「受講者に伝わる指導法」や「ICLS コースの上手な運営方法」を学ぶ。

ICLS コースへの指導参加は200回を超え、指導者養成ワークショップでも「わかりやすく、やる気を引き出す指導」として、認定インストラクターを目指す若手指導者から高い評価を得ている。「学びが楽しくなる瞬間を作ることが、優れた指導者の使命」と考え、多くの指導者の指導力と自信を高めることに尽力している。

実践で培った指導のノウハウと、受講者を支援する熱意から、初の著書として本書を執筆・出版した。

- 日本救急医学会認定 ICLS ワークショップディレクター
- 日本救急医学会 ICLS 地区担当委員（三重）
- 日本内科学会認定 JMECC ディレクター
- 日本内科学会 JMECC 検討委員会委員
- 日本内科学会認定内科医・指導医／総合内科専門医

※2024年９月時点

2章 フィードバックをする

フィードバックの一言目に
「どうでしたか？」って言っていませんか？

1 フィードバックとは

フィードバックとは「受講者の行動をよい方向に変えるためのもの」で、①受講者の技術や知識の向上を促す、②受講者の学ぶ意欲を促す、③周りにいる受講者にも学びを促す、という３つの効果があります。

逆にいえば、受講者の行動が変わらないものは「フィードバック」とは呼べません。受講者の行動が変わったときに初めて、「フィードバックされた」ということができます。

フィードバックを成功させるポイントは、受講者の行動を正しく評価し、客観的な視点でアドバイスすることです。また、フィードバックは、第２部１章で述べた目標提示と対をなすべきものでもあります（詳細後述）。

② フィードバックの種類

フィードバックにはさまざまな種類がありますが、ICLS コースで指導者が用いることが多いフィードバックは主に以下の４つです。

ICLS コースで頻用するフィードバック

- **肯定的なフィードバック：ポジティブフィードバック**
- **否定的なフィードバック：ネガティブフィードバック**
- **建設的なフィードバック：コンストラクティブフィードバック**
- **受容的なフィードバック：レセプティブフィードバック**

各々のフィードバックについて細かくみていきましょう。

（1）ポジティブフィードバック

ポジティブフィードバックは、相手の行動の「よい点」を評価します。指導者が、肯定的な言葉を用いて受講者の行動を認める（褒める）ことで、受講者は前向きな学習意欲をもつでしょう。また、ポジティブフィードバックは、ほかの受講者に模範的行動を示すことにもつながります。

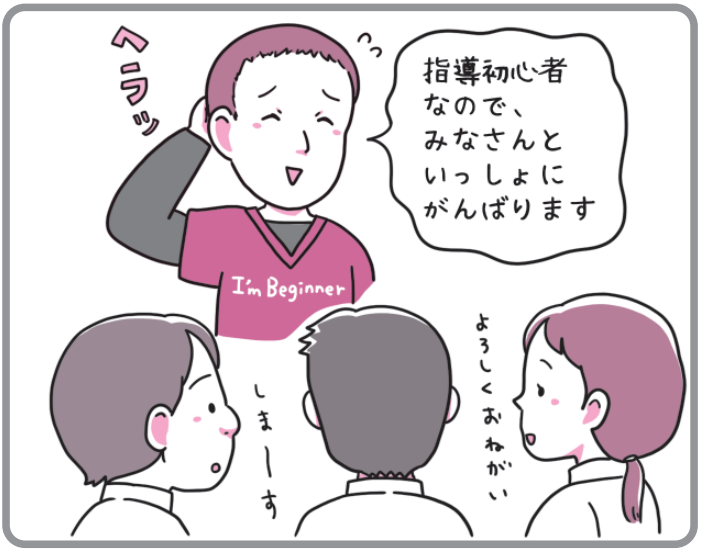
※ポジティブフィードバックの例

「胸骨圧迫が１分間に110回程度のペースでできていましたね！」

「アルゴリズムに沿って、アドレナリン　1 mg を投与できたのがよかったですね！」

1章 指導者として やってはならないこと

コースで指導するときに、ついやっちゃっていませんか？



1 指導者がやりがちな３つの過ち

初心者からベテランまで、指導者がついついやってしまう過ちを３つ示します。多くのコースでディレクターやブースリーダーをしてきましたが、これらの言動をしてしまう指導者は本当に多いです。

かくいう私も、それぞれ少なくとも一度はやらかしていますが、今では意識してこれらの言動を避けるようにしています。

指導者がやりがちな過ち

- 指導者が受講者の限界を設定する。
- 自分の経験や学んできたことばかりを語りまくる。
- 自己紹介で指導初心者アピールをする。

では、私の体験も踏まえて、それぞれ詳しくみていきましょう。

2 受講者の限界を設定しない

受講者が１日のコースを通じてどこまで習得できるかは、神のみぞ知る、です。にもかかわらず、指導者が「今回の受講者なら、この辺りで十分だろう」という先入観をもつと、その段階まで習得できた時点で指導にどこか満足感や諦め感が出てしまいます。

私も過去に、「今日の受講者は習得がなかなか進まないし、予習もあまりしてきてない様子だな。アルゴリズムの習得が精いっぱいかもしれないな」と、若干諦め気味に指導したことがありました。ところが、そのコースをたまたま見学に来ていた私の師匠の師匠のＳ先生が受講者に何やら声をかけただけで、見違えるように受講者の動きがよくなったのです。そのときＳ先生が何を言ったかは教えてもらえませんでしたが、たった二言、三言だったのは記憶しています。おそらく、受講者に「君たちはもっとできる、自分たちを信じなさい」というようなポジティブフィードバックをしたのでしょう。

そしてＳ先生は私たち指導者に対しても、「指導内容が悪いわけじゃない。しかし、受講者の限界を指導者が決めて指導しては、受講者の成長が限定されてしまう。指導者は受講者の限界を決めるべきではない！」と言われました。これを前後に、このときのコースの受講者の到達度は見違えるように上がり、アルゴリズムの習得が精いっぱいどころか、ICLS コースの最終目標までクリアしました。